

緑がつなぐ町・人・暮らし

一般財団法人第一生命財団では、公益財団法人都市緑化機構と共に、「緑の環境プラン大賞」(共催)、「緑の都市賞」「屋上・壁面緑化技術コンクール」(いずれも特別協賛)の、「都市の緑3表彰」に取り組んでいる。これらは、都市緑化を通じ、環境保全、ヒートアイランドの抑止、二酸化炭素の削減、緑のまちづくりや植栽活動を通じたコミュニティの形成などに貢献する事業を支援、顕彰するもので、全国各地で、すでに多くの取り組みが実績をあげている。これらに選出された事業のなかから、とくに都市環境の向上やまちづくりに資する事例を取材し、緑を通じたまちづくりを紹介していく。

取材・文:斎藤夕子 photo:坂本政十郎

愛知県岡崎市
「公園再整備が牽引する公民連携まちづくり」

緑の都市賞 国土交通大臣賞:緑のまちづくり部門

2022年に、緑の都市賞における「緑のまちづくり部門」で、国土交通大臣賞を受賞した愛知県岡崎市の「公園再整備が牽引する公民連携まちづくり」。これは本誌特集内(p21)で紹介した岡崎市の「QRUWA戦略」に含まれるものだ。QRUWA戦略については、前出の特集ページに譲るが、ここで見てきたように、岡崎市のまちづくりが成果を上げているベースには、乙川の護岸整備を東西の横軸とし、そこから南北につながる桜城橋、中央緑道、籠田公園を縦軸とした緑の都市軸

の良好な環境整備がある。ここでは、2019年から2021年にかけて行われたこれらのエリアそれぞれの整備状況を紹介したい。なお取材時には、岡崎市都市基盤部公園緑地課公園活用係の、係長・主任主査の近藤淳さん、主査の森大輔さんに現地を案内していただいた。

桜城橋

乙川に架かる殿橋と明代橋のほぼ中央に、2020年3月、歩行者専用の「橋上公園」として新設された「桜城橋」。

名称は、市民からの公募をもとに投票を行い決定したもので、桜の名所として知られる岡崎城を「桜の城」とたとえ、これが見える橋であることがその由来だ。全長約121m、幅約16m。路面や欄干は、すべてヒノキで覆われている。これは、乙川上流の額田地区に産するヒノキを使ったもので、「木の地産地消」というメッセージを伝えているという。木材の使用量は1123㎡に及び、これは4mの丸太6804本分に当たる。また、橋のヒノキは15~20年ごとに張り替える必要があるため、計画的な森林整備を行うことができるとの期待もある。

「桜城橋は歩行者専用の公園の一部という位置付けですが、災害時等には緊急車両が走行できる構造となっています。このため、橋の強度に対してその分の荷重に余裕があるため、Park-PFIにより民間事業者が橋上にレストランやカフェなどを整備する予定でした。コロナ禍の影響により事業はいったん白紙に戻りましたが、今後も民間



活力の導入による整備を検討していきます」(森さん)

現在橋の上には市が整備した屋根付きの休憩所が設置され、市民の憩いの場となっている。

中央緑道

もともとの中央緑道は、戦災復興区画整理事業により、延長約300m、幅約10mにヒマラヤスギが立ち並ぶグリーンベルトとして設けられた。今回の整備では車道を狭めるかたちで緑道の幅員を最大1.7倍(約16~17m)に拡張。さらに沿道が無電柱化し、景観への配慮と共に、災害時の電柱倒壊や電線の断線などの防災面への対応も行った。リニューアル工事の完成は2021年3月。

「道でもあり、広場でもある」ことから、「みちひろば」と名付けられたこの空間の特徴は、河岸段丘の傾斜地を生かした「大階段テラス」を設けたことにある。

「中央緑道とこれに続く籠田公園も、整備にあたっては市民の方々とワークショップを行いながら意見交換を行い、現在のような空間づくりに至りました。中央緑道に関しては、車道を狭めることになるため、とくに沿線の方々には個別説明を繰り返し、ご理解をいただきました」(森さん)



上●両サイドの車道を狭め、幅員を1.7倍まで広げた中央緑道
左●既存のヒマラヤスギを生かしながら、斜面地に立体的なテラスが連なるように構成されている

籠田公園

中央緑道と同様、戦災復興区画整理事業に伴い整備された籠田公園は、従来、あまり特徴のない一般的な都市公園で、近年は利用者も少なかったという。

再整備にあたっては、中央緑道と一体的にプランが構成された。先に森さんが語った、市民ワークショップは3回実施。この他、地元説明会7回、沿道個別説明58回を経て、基本設計が策定され、2019年7月にリニューアル工事が完成した。なお設計は、中央緑道と共にオンサイト計画設計事務所が行った。

台形のフォルムをもつ公園の広さは約6800㎡。中央緑道の一部から続く旧東海道が縦断している。その街道は「岡崎二十七曲り」と称される屈折した道筋をもつことが特徴で、これは岡崎城下の防衛と、街道筋の商業発展のための工夫だったとされている。リ



左●籠田公園の休憩スペース。手前の舗装された小道が旧東海道にあたる
右●伸び伸びとした芝生広場。屋外イベントの場所としても利用されるようになった

ニューアルではこうした歴史性を生かし、旧東海道を表す園路を設けた。この園路を区切りに、東側は起伏のある芝生広場にステージを設置、多目的に活用できる開かれた空間に。西側は、屋根付きのテラスを設け、テーブルやイスのある休憩スペースとした。また、子どもの遊び場としてゴムチップを敷いたエリアには、複合遊具、水遊びができる噴水も設けた。

「リニューアル前後で公園の利用状況は一変しました。とくに小さい子どもを遊ばせる親子連れの姿は多く、屋根付きの休憩スペースと一体的に利用できるので大変喜ばれています。中高生が集まっておしゃべりや勉強をしている光景もよく見かけます」(近藤さん)

繰り返し行われたワークショップなどのプロセスを通じ、周辺地域のコミュニティも再生された。バラバラだった自治会が「7町・広域連合会」を組織。公園や緑道の活用に関する意思決定が一元的に行われるようになった。そのなかで2021年には、30年来途絶えていた籠田公園での盆踊りが復活。これをきっかけに、若い世代の人々の自治会活動への参加も増えているという。

緑を生かした良好な空間づくりが、町・人・暮らしをつなぎ、生き生きとしたまちづくりに大きく貢献することを、岡崎の事例は明確に示している。



上●乙川に架かる「桜城橋」。路面が木で覆われたこれほど大きな橋は珍しい。「橋を渡る」というそれだけのことが楽しく感じられる
右●橋の上に造られた屋根付きの休憩所

